

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：11501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：26870069
研究課題名(和文) 明治後期の日本外地における漢詩文活動とその思想の実証的研究 初山衣洲を中心に

研究課題名(英文) The ideas and activities of overseas Sinitic poetry in the Meiji Era: with a focus on Momiyama Ishu

研究代表者
許 時嘉 (hsu, shihchia)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：10709158
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治後期に植民地台湾と清末中国で活躍した初山衣洲(1855-1919)の未刊行の私人日記と詩文手稿を分析し、彼の詩文意識における政経イデオロギーと花鳥風月的な審美観の相互作用を究明したものである。具体的には、まずは衣洲日記内容の翻刻・解読を行い、彼と現地の人々との交友関係と結社活動のルートを構造的に把握した。次に明治期漢詩人たちの「大志を広げ」のための文筆活動と「新天地での詩料探し」という海外雄飛時の文学スローガンとの連動現象を明らかにした。さらに、初山衣洲の「無用」のレトリックを分析することで、詩文創作の「志」と政治協力につながる「戯れ」の技法とのねじれが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study is to analyze the conscious of literature writing of Momiyama Ishu (1855-1919), a Japanese composer of Sinitic poetry active in Colonial Taiwan and late Qing China, and to examine the interaction between his political ideals and romantic aesthetics. By reprinting and analyzing his unpublished diaries and manuscripts, one can piece together how he built up his personal poetry connections with the local Chinese community, which was otherwise unknown before. Furthermore, the saying "Be ambitious", which refers to the purpose of literature writing by Japanese composers of Sinitic poetry in the Meiji Era, is found to be connected to a propaganda slogan called: "Go abroad and seek writing materials". By analyzing Momiyama's rhetoric of "Futility", the contradictory that exists in his expressions of ambition in literature writing and his the ironic styles in political criticism is revealed.

研究分野：思想史

キーワード：初山衣洲 漢詩文 植民地台湾 帝国協力 花鳥風月

1. 研究開始当初の背景

漢詩文リテラシーは1880年代から、日本帝国主義のアジア進出に伴う海外雄飛思想の影響下で、前近代の知を基盤とする知識人たちのアジア進出の一翼を担い、現地で新たな漢詩文共同体を形成することを可能にした。つまり、近代国民国家の言語ナショナルリズムの高揚の中で、漢詩文リテラシーは逆説的に海外への拡大・拡張を果たした。

その逆説的な現象の出現については、時代遅れの漢詩人たちが国内での閉塞状況ゆえに漢文圏の新天地を求めて一時的に活躍した、と見なされることが多かったが、外部社会の変化以外に、漢詩文というジャンルに潜む二重のエトスを見逃すことはできない。齋藤希史はすでに漢詩本来の二重のエトス構造が近代日本の「文学」概念の再編に影響を与えたと指摘している。それは「仕 = 政治 = 士人的エトス」と「隠 = 文学 = 文人的エトス」とが並立し、かつ対立してもいるという構造である。しかし、この漢詩文のエトス構造の二重性と明治期の政治的な海外進出との連関についてはまだ解明されていないことが多い。

たとえば、台湾国内では早い段階で、海外進出における漢詩文の意義に焦点を当て、漢詩文に期待された政治的懐柔の役割（黄美娥）、植民地漢文による新たな結束力の形成（陳培豊）などの論点が提起された。しかし、これらの研究には日本漢詩文の伝統への理解・認識が欠けているので、日本人の漢詩文創作に潜む花鳥風月的な審美観を過小評価する傾向がある。

他方、日本国内では、漢詩文の文学的性格を重視し、海外詩作に潜む近代的な創作要素や日本人詩人のアジア異文化体験に潜む自文化意識などについて研究成果が相次いで発表された。しかし、政経イデオロギーと花鳥風月的要素の関係については立ち入って考察する鍵を見いだせず、単なる並置に留まっている（入谷仙介、森岡ゆかり）。つまり、海外進出に伴う漢詩文活動において、政経イデオロギーでは解釈し尽くせない花鳥風月的な要素を如何に取り扱うべきなのかという根源的な問題が、先行研究にはいまだ認識されずにいるように思われる。

2. 研究の目的

上記の問題に対して申請者は、漢詩文の規範性への自意識が政経的側面（＝統治者としての権威の証し）と審美的側面（＝和臭の排除による漢詩らしさの追究・完成）の二重性を帯びる、という特徴が植民地の日本人漢詩文家の規範意識と漢詩文再興の動機を揺るがしていたことを検証した。また、彼らの詩文意識に経世済民的な意識と花鳥風月的な意識の混交を見だし、その分析を試みる研究を進めてきた【図書】。

申請者は以上の成果を通して、政経イデオロギーと花鳥風月的審美観のねじれを確認した上で、その両者が無関係な並行現象であったのではなく、実は互いに運動しながら排斥し合ってもいた、という事実を初歩的に明らかにしている。この二通りの意識の混在と相互作用は、西洋近代主義と日本国家主義のせめぎあいの中で、漢詩文リテラシーを軸とする文化的営為に、時には国策を離れ、時には国策と足並みを揃えるような玉虫色の性格を付与してきたことが想定される。しかし、これまでは史料入手の限界があり、分析対象とすべき実例の収集不足が原因で、一部の事実確認は行ったものの、その根源的系譜の構造的性とメカニズムを十分な史料に基づいて解明するには至っていなかった。

したがって本研究は、明治後期日本の海外進出に伴う漢詩文活動に焦点を当て、詩文創作の審美性と海外進出の欲望との連続性・不連続性を明らかにしようとした。特に、明治後期に台湾、中国で活躍した日本知識人初山衣洲とその周辺人物の私人日記・詩文手稿・書簡を対象に、その文筆活動の実態と創作心理を明らかにすることで、彼の詩文意識における政経イデオロギーと花鳥風月的な審美観の相互作用を究明した。初山を研究対象とする理由は、彼が植民地台湾の最大の御用言論機関『台湾日日新報』に勤めた経歴を有するだけでなく、初山のアジア滞在経験（1898～1904年に『台湾日日新聞』記者を務め、1905～1906年に中国人留学生向けの東斌学堂を運営し、1906～1911年に保定陸軍学堂教習を務めた）は日本の膨張政策と軌を一にする一面が見えるからである。

3. 研究の方法

本研究では「一次史料の発掘・解読・分析」と「概念の体系化」の二段階を設定した。

(1) 初山衣洲日記内容の翻刻・解読によって日本人知識人と現地の人々との交友関係と結社活動のルートを構造的に把握した。特に、大阪府立中之島図書館所蔵の初山衣洲の遺稿（肉筆の日記、著書、手稿計134点）の収集と中国滞在時期の日記内容の分析に研究の軸を置き、初山衣洲の海外時代の周辺人物と交友関係を解明し、国内における関連資料の網羅的調査・全体像の把握に努めた。さらに、初山が台湾を離れた後の東京と保定時代の日記を翻刻、解読、分析しつつ、政府史料、公開された出版物と照らし合わせて公的言論の場には見られない交友関係を明らかにした。

(2) 概念の体系化の段階では、更にマクロの時代背景の分析と初山衣洲の個人文学研究の位置づけという二つの方向に展開した。

まずは、明治期の漢詩人の海外活動から彼らの文筆活動への渴望と「新天地で詩料を見つけよう」という総督府の文学スローガンとの連動現象を分析した。特に詩文創作における花鳥風月の審美観の変容に焦点を当てて、日本人漢詩人たちが海外に赴き新しい詩料としての風景を目の前にする際に、いかに江戸以来の作詩作法を無意識に踏襲しつつ、現地の異国の風景を読み替え、入れ替えたのか、という点に注目した。次に初山衣洲の詩文創作を対象として、彼の風景への写生意識に潜む認識論的布置の解明を行った。

4. 研究成果

(1) 初山衣洲日記史料の翻刻、解説の成果を印刷物として出版し、学界における史料の共有化に寄与した【図書】。また、印刷物の形以外、当該資料が2017年後半から2018年にかけて中央研究院台湾史研究所の『台湾日記知識庫』データベース(<http://taco.ith.sinica.edu.tw/tdk/%E9%A6%96%E9%A0%81>)でも全面的に公開する予定である。

(2) 初山衣洲の中国活動の資料収集を行ない、離台後の衣洲の足跡を明らかにした。初山衣洲が台湾から去った後、東京、保定、大阪に転々としていたことがすでに知られているが、なぜ渡清したか、中国で何をしていたか、これまで謎のままであった。そのため、その詳細を知る唯一の手掛かりである、大阪府立中之島図書館所蔵の衣洲の肉筆の日記(東京時代及び天津・保定時代)の収集と解読を努め、国会図書館で発見した清末保定の日本人関係者が手掛けた明治43年分の『保定倶楽誌』(26-32号)を参照し、保定時代の初山衣洲日記に書かれた周辺人物と交友関係を裏付けることができた。渡清前後の日記と彼の同時期の詩文作品とを照らし合わせ、不遇による現実逃避と詩文にひたすら没頭する姿を明らかにし、彼の詩文表現に現れた「過剰な」抒情性とその意義を分析した。国家膨張主義の路線と歩みを共にするとはいえ、衣洲は抒情的なものにもっぱら託し、詩人としての自意識を強調し、時に過剰なほど自己代弁していることが明らかになった【学会発表】。

保定軍事学堂記念館(中国・保定市)の現地調査も行った。残念ながら中国共産党の戦争史観による資料展示がメインで、清末に軍事学堂で活躍していた日本人教習の関連資料が貧弱であることが分かった。

(3) 海外日本人漢詩人の詩料探しの心理を分析した。海外雄飛時代を代表する国粋主義者・志賀重昂を取り上げ、彼の海外巡航時代の漢詩創作における「詩料」への絶えない欲望が作品に描かれた「志」の在り方とある補充関係を保っていると提起し、明治期の海外

雄飛時代における漢詩人の位置づけを問い直してみた。志賀重昂の海外遊歴時の漢詩作品が物への描写を極め、目の前の景色を実体化する傾向を持っていることで、あの物に集中する語り方は江戸時代から「志の不在」の詩文伝統を引き継いだ側面があるのではないかと分析した。一方、「詩言志」という漢詩本来の詩体の特徴に掻き立てられる部分は今度「大志を広げ」という海外雄飛の時代を背景にする場合、目の前の風景を語ろうとすることにとどまらず、「詩料」を渴望する海外雄飛の欲望に一変する、という可能性も現れてくるのではないかと提起した【学会発表】。

(4) 寺門静軒、成島柳北の無用論から、初山衣洲の無用のレトリックを分析し、詩文創作における「志」と花鳥風月の審美観との関係性を考察した。滞台時の初山衣洲の無用論は、寺門静軒や成島柳北など漢文繁昌記の伝統を意識したうえで展開されたものとはいえ、外部世界の不条理への鋭い観察と自己自身への反省をともに内包していた静軒や柳北の風刺文と異なり、「有用」世界と「無用」世界との緊張関係を把握せず、通俗的な道徳論に留まることが明らかになった。そして、同時代の花鳥風月的な竹枝詞とも異なり、衣洲の竹枝詞は隠喩を戯れとして活用し、目の風景との二重視に終始している。しかし、その「戯れ」という挑戦は本来の風刺精神を失って、戯文のレベルに停滞し、時に植民地権力構造に「協力」する形で綴られていることを明らかにした。【学会発表、図書】

(5) 同時代の日本海外拡張における文人たちの行動原理の原型への考察を広げるため、植物学者田代安定(1857~1928)の肉筆の踏査手稿(台湾大学図書館台湾特蔵資料室所蔵)を収集した。初歩の解読では、田代が踏査の傍ら、ノートにしばしば遊び感覚で自作の漢詩を記入していたことが判明した。明治期漢詩文教養の普遍性と多様性を反映する貴重な資料として今後は更なる分析が必要になる。また、上海図書館、北京国家図書館で清末天津地方出版の新聞雑誌を対象に、初山衣洲がかかわる中国人留学生の受け入れ、同時代保定軍事学堂の言論動向、を中心にして文献資料の初歩的調査を行った。衣洲の生きた清末の社会輿論の実態を理解するのに大きな示唆を与えるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

許時嘉、「書評 松田京子『帝国の思考—日本「帝国」と台湾原住民』」、『日本学報』34号、査読無、pp.185-191、2015年。

〔学会発表〕(計 3 件)

許時嘉、「明治期無用者論的延続與断裂——以成島柳北與初山衣洲為例」,「文化・文学:歴史與記憶」シンポジウム口頭論文、査読無、大連理工大学(中国・大連市)、2016年6月25日。

許時嘉、「明治期日本漢詩人の海外活動と漢詩文創作——初山衣洲を例にして」,査読有、日本台湾学会第17回学術大会口頭論文、東北大学、2015年5月23日。

許時嘉、「新天地における詩料への欲望——明治期の海外漢詩創作をめぐる」,日本比較文学会2014年度東北大会口頭論文、査読無、弘前大学、2014年11月1日。

〔図書〕(計 3 件)

杉原達〔編〕許時嘉ほか共著、『断裂し重なりあう経験——「帝国」日本といくつもの「戦後」』,青弓社、2018年2月(出版予定)*論文「漢詩人の越境と帝国「協力」——初山衣洲の台湾体験を例として」を執筆。

許時嘉・朴澤好美、『初山衣洲在台日記1898-1904年』(中国語・日本語対訳付き、解説付き)、査読有、中央研究院台湾史研究所、pp1-625、2016年。

許時嘉、『明治日本の文明言説とその変容』,査読有、日本経済評論社、pp.1-362、2014年。

6. 研究組織

(1)研究代表者

許時嘉(Hsu, Shih-chia)
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号:10709158